

はじめに

☆後期もプリントはHP「イクヲのプリント置き場」(<https://kobun.webnode.jp/>) & 「裏倉庫」(<https://urasonokoi.webnode.jp/>)の「授業の補助プリント」のページに、前日にはアップロードしていきます。

【後期の講義について】

1 各回、その文章を通して学べることを学び尽くす。スピードは上がる

入試問題で（比較的）高得点を取る（目標）
そのために必要なものは

古文読解力

- ① 単語力 …前期で培った知識を、単語帳を繰り返すことで確実に
- ② 文法 …前期で培った知識を確実に・さらにちよこちよこ付け足していく
- ③ 古典常識 …テキストの文章の中で語っていく・ハンドブックを持っていでもいい
- ④ 自分で文章を追いかけて、話をつかまえる力

→後期は「共テ対策篇」で④に力を入れよう

★共通テストの選択肢を攻める戦略

2 **予習**はかならずすること。（後期はもう、本文をノートに写すということは必ずしも必要ではない）

- a とにかく文章を何度も読んで、「誰が誰にどうした」かをつかまえない。（後掲A・B参照）
- b 選択式の設問の解答は、「なんとなく」ではなく、本文を根拠に論理的に解答を導き、説明できるように。
- c 記述型の設問の解答は極力答案を作してほしい。無理でも箇条書き程度で、「こんなことだろうな」とメモを作ってみよう。
- d 前回文章の途中で講義が終わっていて、一応予習をしてあっても、前日にもう一度丹念にその文章を精読してから講義に臨むこと。

3 **復習**は二段階で（あるいは何段階でも）。

- a まず講義後できるだけ早く、その講義を頭の中で再現しつつ、学んだ範囲の文章を読み返しなさい。
- b さらに、その文章の中で伝えられた学習項目をマスター。指示された単語や文法事項を調べ、マスターしなさい。
- c ある程度時間を置いてから（2〜4週間後、話を忘れた頃に）、白紙の本文を読んで、話を迎えることができ、的確に解答を導けるかどうか見直しなさい。その際、つかえる所や分からない部分があれば、何かが抜け落ちている。そこを再復習しなさい。

【古典（古文）とは】

A 古典（古文）とは**劇**である——と意識しよう・見ようとしよう（文章を頭の中で映像化しよう）

テレビでドラマを見るときと同じように

場面（いつか・季節は・どこか）

登場人物（誰がいるのか）

何をしているのか（誰が誰にどうしているのか）

場面を思い浮かべながら読む

（頭の中で常に文章を映像化）

が見えていなくてはならない

→ 絵（図をかくてもよい）

B 古文（物語）を読むとは「文章から人間劇をつかみ取る作業をすることだ」

……そのために、場面を思い浮かべ（頭の中で文章を映像化し）つつ以下の三点＋αを追いかけて続けなさい

明らかにしていくこと

「だれが、だれに（なにに）、どうした」

主客体 ……省略される「隙間」になっていること多い↑補え

*全述部に対する主語を書いておく

*全発言に発言者を書いておく

それでもわけの分からない場合は

なぜ

その場で、その人物はそんなことをするのか・言うのか判断せよ「事情納得」

↓注・リード文・その他何でも利用して納得する

C 長い古文は適当に区切って読む「主語の変わり目で区切る…左は読点「、」前後の主語のかねあいのまとめ

（原則）主語変わらない

（原則）主語変わるが多い

節としてのまとめ

↑これは規則ではない
単なる和文の傾向
大切なのはドラマと
してのつじつまがあ
うかどうか

「を・に・が・ど・ば」で区切ってそれぞれ主語（誰が誰にどうしたか）を押さえる（基本）

ただし……

悲しければ、泣く

心はやれども、念じて待つ

↑すきまがあれば書いていく

↑こんなことも……

- D（予習時）（場面を思い浮かべ、ドラマをつかまえた結果を）本文に書き込みをしておこう
- a 場面を思い浮かべるのに役立つ情報（時・場所・アイテム等）は○で囲む↓けつこういいかげんでもよい。
- ただし、「この情報を見逃すと話が分からなくなる」という情報は確実に印。
- b 人間（登場人物）が出てくれば、□で囲む。
- c 主語の変わり目には区切れ目マーク（〽）。
- d 省略されている主語や目的語、話者などを書き込む。
- ←
- （授業時）自分の捉え方の間違いを赤で修正↓（復習時）間違えた原因を追及し、つぶす。

【五】『十訓抄』

A 断定の助動詞「なり」

なり	未	用	止	体	已	命	型
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	形動 (ナリ)

接続：「なり」…体言・活用語の連体形・副詞・助詞

意味：イ 断定へ「デアル」

a 存在の「なり」 「場所なる体言」へ「ニアル・ニイルX」

春日なる三笠の山へ春日にある三笠山 家なる妹へ家にいる妻

b 断定の「なり」の連用形「に」↑次のような形の「に」で、「デアル」の「デ」と訳せるとき

に	(X) (あり系)	(「X」部分・「あり系」部分が省略されていることもある)
て	あり	へ「デアル」
し	侍り・候ふ	へ「デゴザイマス」 * 「て」へ「接」
へ「係」	おはす・おはしますへ「デイラツシャル」	* 「し」へ「副」

月の都の人にて、父母あり。へ月の都の人であって、そこに父母がいる
人を見るべきにもあらず。へ人が見るはずのものでもない

まことにさにてこそ侍れ。へ本当にそうでございます↑副詞に接続することもある

何事にか。へ何事であろうか (「にか」のあとに「あらむ」などが省略されていると考える)

c 断定「なり」は助詞や副詞に接続することもある。見ればなりへ見たからである さなりへそうである

* 「体言 or 体なり」があれば、へ「デアル」を思い浮かべる

B 伝聞推定の助動詞「なり」

なり

聴覚でキャッチした情報を元に判断推定したことを述べる語

(ラ変型活用↓「古文重要事項」)

接続：終止形 (ラ変型には連体形) (＝ウ段音接続)

意味：イ (聴覚による) 推定へ「ヨウダ・ラシイ、スルノガ聞コエル」

ロ 伝聞へ「ダソウダ・トカイウコトダ・トカ聞イテル」

a 音に関する情報があれば↓「推定」

笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬなり。↓推定

へ笛をたいそうおもしろく吹いて、通り過ぎてしまったようだ

b 耳で聞いて判断しているとすとおかしい場合は↓伝聞

世の中に物語をいふものがあるさうだが、それを、なんとかして見たいものだと思ひつつ…… ↓伝聞

* 「スうなり」があればへ「ラシイ・ソウダ」を思い浮かべる (断定の「なり」との識別はしないといけないが)

c ラ変型活用語+「なり」↓連体形の撥音便化や「ん」が無表記になっていることがある

例	あり+なり ↓	あるなり ↓	あんなり ↓	あなり ↓
			← 撥音便化	← 「ん」が無表記

「う」いう現象が起っていたら「なり」は伝聞推定

C 古典文法四つの「なり」

古文では「なり」「なる」は①断定の「なり」、②伝聞推定の「なり」、③ナリ活用形容動詞の活用語尾、④動詞の四つの場合がある。

① **体言 or なり** ↓断定 …「X(する)なり」へX(するのだ)へ

② **なり** ↓伝聞・推定 …「Xすなり」へXするらしい・するそうだへ
→(ラ変型の場合は㊸)
はつきり目で見たわけでないので断言できない・
聞いた音声から↓推定・伝え聞いたこと↓伝聞

*文法的に①②を区別できないとき(㊸㊸同形の動詞＋なり・ラ変型㊸＋なり 等)は、文脈から判断

a	うわさ・人の話	＋なり	↓伝聞	d	形容詞ーかる	なり	
b	音・声	＋なり	↓推定		形容詞ーかん	なり	↓伝聞・推定
c	その他	＋なり	↓断定	e	形容詞ーか	なり	
f	ラ変型語の撥音便・「ん」無表記落	↓伝聞・推定			形容詞ーき	なり	↓断定

③ **態様語 なり** ↓ナリ活用形容動詞の活用語尾 …状態様子の語につくとき

④
 ず ー (し) ー
 ー に ー
 等 } **なる** ↓ラ四動詞「なる」…(become)の意があるとき

止 **伝聞・推定**

体 **断定**

a 男もす**なる**日記といふものを女もしてみむとてする**なり**。

伝聞・推定

b 笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬ**なり**。

↑「あり」の連体形の撥音便「あん」の「ん」の無表記

c 世の中に物語といふものの**あんなる**を、いかで見ばやと思ひつつ

ナリ形容動詞の語尾

一 伝聞・推定

d いと優**なり**。

ラ四「なる」の用

e 髪もいみじく長く**なり**なむ。

2 おくる【後る・遅る】**ついて行けずに、遅れる・後に取り残される**

① 遅れる

② 後に取り残される

③ 先立たれる・死に後れる

④ 劣る

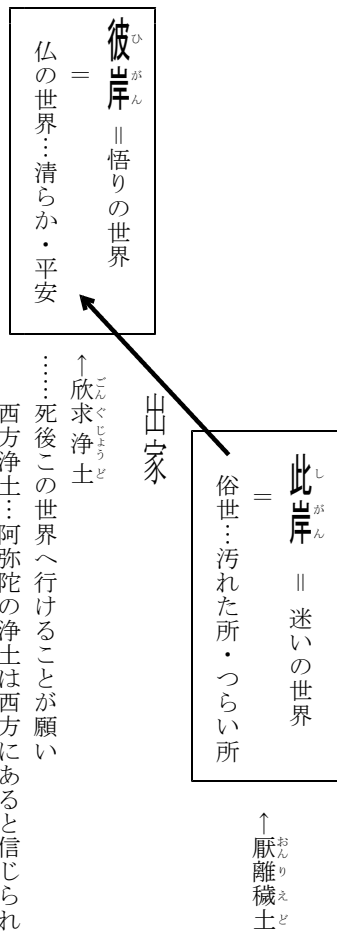
3 ありく **一** (人・動物などが)移動する・歩く・歩きまわる (歩行に限らない)

【歩く】 **一** (補) ① ……してまわる・あちこちで……する

② (あれこれ) ……し続ける……して過ぐす

D 出家

世俗の世界を捨て、仏門に入ること。古典世界では多くの人物が、この世に絶望したため、心の平安を得るため、死後の安息を願って、などさまざまな理由から出家をしている



☆ **出家**とは生きながら死ぬ（俗世を離れ、仏の世界に入る・仏弟子になる）こと

＝ すべてのも 財産 権勢 縁 を捨てる（すべての執着を捨てる）

↓ 残される家族としては、その人が死んだに等しいくらい悲しいこと

【「出家する」を表す慣用表現】

世

す っ（捨つ）
そ む く（背く）
は なる（離る）
の が る（逃る）
い と ふ（厭ふ）
い づ（出づ）

頭 様 身

あたまをまるむ（丸む）
かしらおろす（下ろす）
髪をおろす・落とす・かざりおろす
か は る（変はる）
か ふ（変ふ）
す っ（捨つ）
や つ す（棄す）

そむきすつ（背き捨つ）・そむきはつ（背き果つ）・入道す・家をいづ（出づ）・ひじる（聖る）

E **上達部**…超一流の貴族（大臣級・内閣にあたる）・一位く三位（四位の参議）。公家・公卿・月卿・月客ともいう。

殿上人…一流の貴族。清涼殿の殿上の間（天皇の言葉聞く部屋）に入ること＝昇殿をゆるされた貴族・四く五位（六位の蔵人）。雲客・雲の上人ともいう。

地下人…昇殿を許されない人。ふつう六位以下。中・下級役人。

F 【主体判定のしかた】基本原則…理詰めで判定する

- ①登場人物を整理↓人は□で囲む・一覧表や図にする *呼称の言い換えにも注意
- ②場面を思い浮かべて（絵を描いてもイイ）
- ③全述部・全発言について判定
 - a 接続助詞・前との続き具合で（「は・ども・が・を・に」の前後では主語が変わりやすい）
 - b 引き算で―登場人物一覧からその主語になり得ないものを引いていく
 - c 敬語によって―登場人物によって、敬語を使ったり使わなかったり・レベルが違ったり
 - d 後ろからさかのぼって判断

- e 古典常識によって
 f 文法的判断によって
 g リード文や注のヒントによって
 h その他の知識(文学史・日本史)によって
 ……どのやり方を使っても良い・とにかく理詰め、ドラマとしてつじつまの合う判定を

☆物語冒頭にいきなり主語なし述語↓**主体(主語)** || **主人公**と考えて読み進めよ。矛盾が生じれば、修正する

7 苔の衣 へ①僧侶や隠者など、俗世間を離れた人の着る粗末な衣服 へ 7 苔の下

G 副助詞「だに」

イ **類推へ「サエ」** 軽いものを挙げて、言外にそれより重いものを類推させる

ロ **最小の限度へ「セメテ」** ダケデモ ↓ 下に **命令・願望・希望・意志・仮定** があるとき

H J 現代語感覚ではぴんときにくい「**千**」

③ 技量。腕前。わざ。手段。方法。

a 筆跡。書風。文字。(男手 || 真名 || 漢字 || 女手 || 仮名 || かな)

b (楽器を演奏する) 技術。奏法。調子。曲。

④ 手下。部下。配下の軍勢。

⑤ 傷。負傷。(……「浅手」「深手」)

⑥ 交際。交友関係。「手を切る」「手を分かつ」

9 たづぬ【尋ぬ・訪ぬ】

- ① 捜し求める・追い求める ② 事情を調べて明らかにする ③ 訪問する
 ④ 問いただす

【参考】

宮中(皇居)には二十数棟の建物があり、帝は通常「**清涼殿**」に暮らしている。その清涼殿の中に「**昼御座**」という、帝が昼間いる御座所があり、その隣の帝のお言葉聞くための詰め所が「**殿上の間**」である。その「殿上の間」に入ること(昇殿)を許された者を殿上人という。

政治の中枢 ↓			宮中の警固 ↓			帝の 男性秘書 ↓		
官			大			所		
上達部（月卿・月客）			大政大臣			近衛府		
左大臣			右大臣			蔵人		
内大臣			大納言			正一位		
中納言			中納言			正二位		
参議			参議			正三位		
宰相			宰相			正三位		
大弁			大弁			正四位		
中弁			中弁			正四位		
少弁			少弁			正五位		
少納言			少納言			正五位		
						正六位		
						正六位		

【解答例】

- 問一 a ア b ウ c イ
 問二 帝に先立たれ申し上げたので、良岑宗貞はすぐに剃髪出家してしまった。
 問三 ウ
 問四 3 みすばらしい 4 筆跡・(文) 字
 問五 X ア Y ウ Z エ

【通釈】

良岑宗貞は深草の天皇(＝仁明天皇)の近臣である。藏人頭になった時、帝に先立たれ申し上げたので、(宗貞は)すぐに剃髪して(出家して)しまった。(そして) どころもなく(あちこちを) 仏道修行をして回ったのだった。初瀬山(＝長谷寺)で妻に行き逢ったけれども、(妻の前には) 現れることもなく、清水寺では小野小町に(あの僧は元の良岑宗貞ではないかと) 怪しまれて、逃げてしまった。

そうして、次の年、帝の御喪の明ける日にあたって、殿上人達が御喪服を脱ごうということで(みそぎのために鴨川の) 河原に出ていた所に

みな人は……＝皆さんは、花のような(美しい) 衣になって(脱ぎ替えて) しまうそうだ。(それにひきかえ、脱ぎ替えることもなく今もなお涙に濡れているこの私の) 粗末な僧衣の袂よ、せめて乾くだけでもしておくれ。

と詠んで、柏の葉に書いて、みすばらしい子どもを使って(河原に) 置かせたのだった。(殿上人達がそれを) 手に取って見ると、(その文字を) 良少将の筆跡だと見て取って(＝判断して)、「これを持つて者は今」どちらに「いるか」と思って使いの子どもをさがし求めたが、(その子どもの姿はどこにも) 見えなかった。そうこうするうちに、後には(宗貞は) 僧正となって、花山の僧正遍昭と言ったのだった。

【五】の学習内容

- | | | |
|-------------------------------|---------------|--------------------|
| □ 古典(古文)とは | □ 古文(物語)を読むとは | □ 長い古文は適当に区切って読む目安 |
| □ 主体判定のしかた | | |
| □ 断定の助動詞「なり」 | □ 推定の助動詞「なり」 | □ 「なり」の識別 |
| □ 「出家とは」・□ 「出家する」を表す慣用表現 | | |
| □ 副助詞「だに」 | | |
| □ 「上達部」「殿上人」「地下人」 | | |
| □ 「手」「ありく」「たづぬ」「苔の衣」「おくる」など古語 | | |

☆今回プリントに載せた文法事項、すべて文法の教科書で確認し、演習問題を解くなどしてマスターすること
 ☆今回指示した単語すべて辞書などで確認すること

【D】『平家物語』

A【和歌】「共通テスト古文」は和歌が好き

・和歌はセリフ

登場人物のその時の心情の現れ↓そういう場面で人間がふつうどんな気持ちになるか

- ・心情語(形容詞・形容動詞など)
 - ・述部(区切れ)
- に注意

〈手順〉0まず、誰が、どんな状況で詠んだ歌か、をおさえる(最重要!)↓その人物のその状況の心情が表現され
 ①とりあえず、五・七・五・七・七に切る
 ②文法的・意味的に。にあたる部分は。を打つ——区切れを見つける(重要事項26P参照)
 ③倒置に注意しつつ、心情の表れ(=心情語・述部に着目)として解釈する
 *修辞(縁語・掛詞・見立て)にも注意

B引き歌:古歌(多くはその一部)を引用することを引き歌という

引き歌の表現する心情⇨引用者の心情

(作者が登場人物の心情やその場面の情趣を引き歌で表現することもある)

3やすらふ【休らふ】

休息して時間を過ごす

- ①休息する
- ②立ち止まる
- ③滞在する
- ④ためらう・ぐずぐずする

4やさし

自分の身が
やせ衰える
ようにつらい
気持ちや、そう感じさせるほど
相手が優美な様子

- 【恥し】
 - ①身もやせ細るほどつらい・耐え難い
 - ②恥ずかしい・気が引ける
 - ③つましやかだ・控えめだ
 - ④優美だ・趣がある・上品・しとやかだ
 - ⑤けなげだ・感心だ
 - ⑥思いやりがある・情け深い
- 【優し】

C「疑問・反語」「態様・方法」を表す副詞「な(何)系」「いか(如何)系」

「な(何)系」
「な(何)系」を「な(何)系」

「な(何)系」
「な(何)系」を「な(何)系」

「な(何)系」
「な(何)系」を「な(何)系」

「な(何)系」
「な(何)系」を「な(何)系」

「な(何)系」
「な(何)系」を「な(何)系」

*「いかで系・いかにして系……意志・希望・願望」の時へなんとかして・どうにかして……